



Title	5世紀における供膳器の変化と地域性
Author(s)	中久保, 辰夫
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 2009, 43, p. 1-26
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/11865
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

5 世紀における供膳器の変化と地域性

中久保 辰 夫

1. はじめに

日本では共有する食器に加えて、各自がそれぞれお茶碗や取り皿などを用いた食卓風景をよく見かける。こうした個人別の食器を用いる食膳形態は、古く見積もった場合、弥生時代後期にさかのぼり（都出1984、1989）、古墳時代中期には確実に認められることが明らかになっている（佐原1983、内山1997、坂野2005など）。

およそ4世紀末から5世紀末に該当すると考えられている古墳時代中期には墓制、手工業生産、乗馬の風習、カマドの導入など、朝鮮半島南部と共通する要素が様々な遺構・遺物に目立つようになる。供膳器とその使用形態に関しても、朝鮮半島南部を経由した食器様式の影響を受けていることが指摘されている（西1982、内山1997、宇野1999）。

ただし、近年、渡来系文物に関する研究の進展によって、渡来文化の受容には日本列島の各地域が足並みをそろえて進行する部分と、地域独自の動きをみせる部分があることが判明しつつある。たとえば、古墳副葬品の研究からは日本列島と朝鮮半島南部の各地域が必ずしも中央を介さない独自に交渉を行っていたという議論が活発になってきた。また、畿内地域を対象に、日常の調理器である韓式系軟質土器の量や受容のあり方に、旧国や集落といった単位の地域差があることも判明している（今津1994、中野2008b、中久保2008など）。こうした研究状況の中では、供膳器の受容についても地域性を再検討しなければならないと考える。

そこで畿内とその周辺地域から出土した土器資料をもとに、古墳時代中期を対象にして、供膳器の変化と地域性について考察することにした。食器を扱う上では木製品もともに扱うべきではあるが、資料的に恵まれないため、あくまで土器からみたあり方であることを先に断っておきたい。

なお、本稿でいう古墳時代中期は、須恵器編年（田辺1966・1981、田中清2002）でいう TG232型式期から TK23・47型式期を指すことにする（以下、型式を省略する）。中期前半という場合、TG232期から TK216期を指し、TK208期を中期後葉とする。中期前半は TG232期を中期初頭、TK73から TK216期を中期前葉と細分し、この時期に生産された須恵器を初期須恵器と呼ぶ。土師器は、辻編年（辻1999・2002）を参考に高杯の変化を重要視している。須恵器が出現する前段階は、古墳時代前期後半（布留3式）とし、無稜高杯が供膳器の主体を占め、口縁部より体部高が大きい小型丸底土器が増加することなどを時期の指標としている。

2. 研究史

古墳時代における供膳器に関する研究は、東日本に比べて西日本各地では遅れている。しかし、90年代後半以降、土師器の編年研究や供膳器の地域性に関する研究が進展し、その結果、以下の点が判明してきた。

供膳器の変遷と画期 まず、弥生時代から古墳時代にかけて供膳器の変遷が明らかとなってきた。すなわち、弥生後期から古墳前期初頭では高杯、鉢、そして小型丸底土器などが用いられるが、前期前半には鉢が少数となり、供膳器の主体は高杯、小型丸底土器となる（都出1982、佐原1983など）。中期になると須恵器が導入され、土師器杯が増加する。その時期については、中期初頭（TG232期）に見積もる見解（坂野2005）、中期前葉（TK73～216期）とみる意見（辻1999、中野2008a）と出現時期に関する理解が異なる部分がみられるが、多様な杯が多くみられるのは中期前葉である。

古墳前期における鉢や碗をめぐっては、都出比呂志氏と西弘海氏、佐原眞氏では評価が大きく異なる。都出氏は高杯と小型丸底土器が個々人の食器であると考え、弥生時代後期から一貫して個人別食器が使用されている、とみる（都出1984・1989）。一方、西氏は須恵器蓋杯の普及を重要視し（西1982）、佐原氏は畿内地域には鉢が減少すること（佐原1983）を指摘して、古墳中期に銘々器が成立すると主張した。

ただし、この議論において、食器の形状と使用形態から内山敏行氏が整理したように、都出氏は高杯という置食器と鉢などの手持飲用器、西氏は須恵器蓋杯という外来の手持食器を対象としており、両者は機能や使用形態が異なるものを評価している点には注意が必要である（内山1997）。内山氏は、TK73期に須恵器蓋杯、土師器の杯といった新来の手持食器が多量に現れ、日常食器の大半が蓋・杯類に移行する変化を重要視している（内

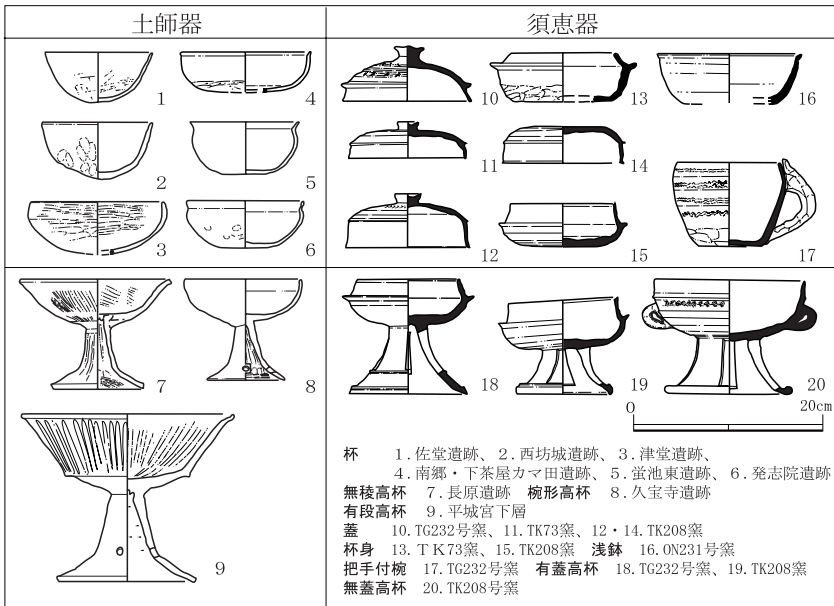


図1 土師器と須恵器の主要供膳器

山1997；p28)。なお、内山氏が整理した、使用法による供膳器の分類名称は有効と思われるので、本稿でも用いることにしたい。すなわち、杯や蓋杯など手で持ち上げて口を近づけて使用するものを「手持食器」(図1-1～6、13～17)、高杯など床や机の上で置いたまま使う器を「置食器」(図1-7～9、18～20)とする。

供膳器の系譜と地域性 古墳時代中期の供膳器は、硬質に焼成された陶質土器と初期須恵器、軟質焼成の土師器から構成される。硬質の陶質土器と須恵器については、日本列島で生産されたものを須恵器、朝鮮半島南部で作られ舶来したものを陶質土器と呼称しておきたい(定森1994など)。ただし、両者の判別が難しいものがみられるため、その場合は「陶質土器・初期須恵器」と一括する。

陶質土器・初期須恵器の供膳器には杯、椀、高杯、鉢などがあり、それぞれ蓋が伴うものや把手がつくものがある。近年では、朝鮮半島南部における地域性が鮮明になりつつある(定森1994、白井2001、寺井2002など)。また、大阪府堺市大庭寺遺跡の発掘調査成果によって、須恵器の源流は加耶各地であることも判明している(朴天秀1995、岡戸1995など)。ただし、ON231号窯(西口1994)に百済地域や大加耶地域の影響がみられるなど、陶邑における須恵器の系譜は決して洛東江下流域のみに系譜が限られるものではない(田中清2002)。

畿内地域を対象とした土師器の供膳器に関する研究も進んできた。辻美紀氏は高杯を基軸とした土師器の編年案を提示した(辻1999)。また、土師器は須恵器と同様の規格性を有し、製作技術から旧国ごとの地域性があることも述べられている。最近では、中野咲氏が奈良盆地を対象にして、土師器の杯の変遷をまとめ、大和盆地の南北で地域差がみられることを指摘している(中野2008a)。中野氏が説く地域性は、発掘調査事例の実態とあわない側面もみられるため(北山2009)、検討の余地を残しているものの、

土師器に細かな地域性を見出せるようになってきたのである。

坂野氏は朝鮮半島南部における軟質焼成された杯の地域性を整理した上で、河内地域には馬韓系譜の杯が、大和地域には金官加耶系の杯が導入されることを指摘し、地域性の背景に各地の「外交」先の差異を読み解いた（坂野2005）。ただし、史的評価の基礎となる土器の分析については編年的な位置づけ¹⁾や分類基準などに問題も多い。また、置食器など他の食器との関係についてはふれられておらず、課題が残されている。

研究史上の問題点 以上のように研究史を振り返ると、近年、5 世紀における供膳器の研究には著しい進展がある。しかし、朝鮮半島南部からもたらされた土器資料の分布状況や地域差が判明しつつある今、次に述べるような視点から検討する必要があるのではないだろうか。

すなわち、供膳器の変遷や地域性が明らかになりつつあるものの、現状では陶質土器・初期須恵器と土師器は個別に研究が進んでおり、そのセット関係などの点は、意外と研究がなされていない。両者の関係については、使用形態とも関連する内容量にも目を向けていく必要があるだろう。また、同様に供膳器の評価は、土師器杯や須恵器蓋杯が注目されているが、置食器である高杯との関連にはあまりふれられてはいない。これらの土器の相互の関係を探っていくことによって、供膳器の変化や地域性の背景について議論を深めていくことが可能になるだろう。

まずは外来の供膳器の導入に時期差や集落差が見られるのかどうかとといった点をみていきたい。

3. 陶質土器・初期須恵器の導入と供膳器の変化

畿内地域の主な集落遺跡（図2）を対象にして、須恵器供膳器の導入と土師器との関係について、時期ごとに考えることにしよう。

表1～3は、報告されている資料を中心に供膳器の出土点数を示したも

のである。土師器高杯は、辻氏による分類（辻1999）を参考に杯部形状から4つに分類した。脚部のみの資料は表にあらわしていないが、必要に応じて補って記述したい。手持食器については、研究者によってその呼称が異なっている現状であるが、本稿では杯と統一したい。中野氏や坂野氏によって底部形態が重要視されているが、実は平底と丸底の判別が難しいものが多く含まれるため、口縁部形状から外反、内湾、内傾するものに細分する。内傾する口縁部は、須恵器杯身などと共通する形状である。

陶質土器・初期須恵器は器形から蓋、杯身と把手を有さない深手の碗や浅鉢、高杯、把付碗に分類し、高杯は蓋の有無によって細分している。

中期初頭（TG232期） まずは、中期初頭（TG232期）の様相からみていきたい。表1に掲げた大阪府大阪市長原遺跡群（田中清2006）、安威遺跡（奥・酒井2000）、奈良県御所市南郷遺跡群（坂ほか1996・2000、佐々木

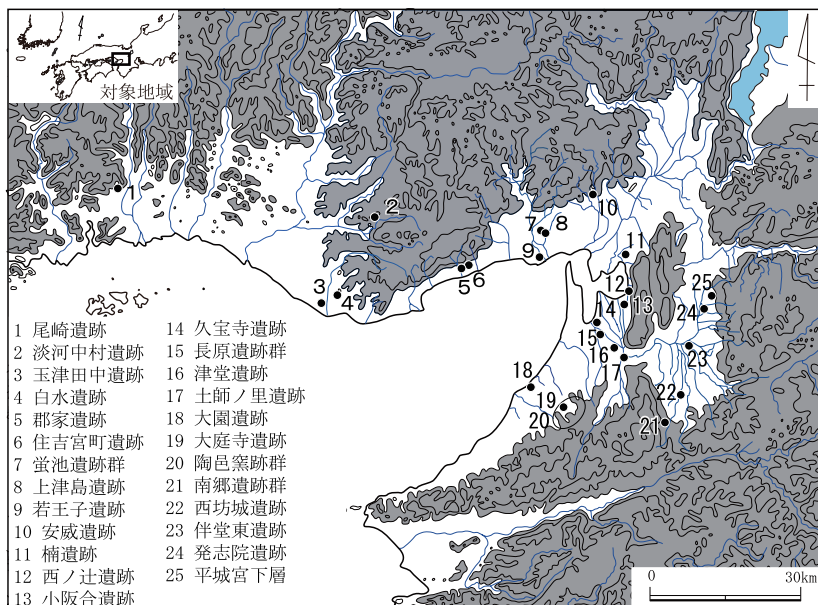


図2 対象とする集落遺跡

表1 中期初頭における供膳器の構成

			土師器							陶質土器・須恵器				
			高杯				杯			蓋	杯身・浅鉢	高杯		把手付碗
			有段	有稜	無稜	碗形	外反	内湾	内傾			有蓋	無蓋	
時期	地域	遺跡名												
中期初頭	河内	長原遺跡群	●	○	●	○				○	○	○	●	○
		土師ノ里遺跡	○		○									
	大和	南郷遺跡群	●		●	○				○			○	
		伴堂東遺跡	○	○	○			○						
	摂津	安威遺跡	○	○	●	○				○	○		○	○
		若王子遺跡	○		○									
蛍池遺跡群		●		○	○									

●10点以上、○10点未満出土、遺構出土で帰属時期が確定的なものを対象にした

ほか1999、青柳2003)、兵庫県尼崎市若王子遺跡（渡辺ほか2006）などにおいては、最古相の初期須恵器に伴う良好な土器資料が出土している。

まず、表1を概観すると、陶質土器・初期須恵器の供膳器が出土する集落と出土しない集落があることに気づく。今回取り上げた事例でいえば、それらを出土する長原遺跡群、南郷遺跡群、安威遺跡などはその導入に積極的な集落であるとみえ、大阪府藤井寺市土師ノ里遺跡（松村ほか1983）や奈良県三宅町伴堂東遺跡（坂ほか2002）、若王寺遺跡、豊中市蛍池遺跡群（合田ほか1994、亥野ほか1998）などの集落では陶質土器・初期須恵器が出土していても、供膳器はあまり出土していない。これは初期の須恵器生産において貯蔵器を重要視していること（藤田1999）、杯身が出現していないことが反映しているといえる。また、表1をみる限り、把手付椀が普及しているとは言い難い。

出土集落の中でも、多器種の陶質土器・初期須恵器が出土している長原遺跡群と、器種や量の点で劣る南郷遺跡群や安威遺跡のあり方は大きく異なる。長原遺跡群では日本列島で数点しか確認できない全羅南道系の浅鉢（寺井2002）が出土していることも他集落との違いとしてあげることがで

き、このほかにも朝鮮半島南部の各地に系譜がたどることができる陶質土器・初期須恵器が出土している（田中清2006）。

他方、土師器に目を向けると、どの集落においても有段高杯、無稜高杯の出土量が多いことが見て取れよう。長原遺跡群では98-19次 SX701（松本ほか2001）から多量の高杯が報告されており、南郷遺跡群佐田遺跡 SB08（坂ほか1996）、蛭池遺跡群などから土師器高杯が主体であることが判明する。土師器の杯は、伴堂東遺跡から出土しているが少数であり、中野氏の研究によると在来の系譜で捉えられる（中野2008a）。

このように最古相の須恵器を伴う段階においては、一部の集落では外来の影響が認められるが、依然として在来の置食器である高杯が供膳器の主体となっているのである。

中期前葉（TK73～216期） 中期前葉は、内山氏によって須恵器蓋杯、土師器の杯類といった新来の手持食器が多量に現れて、日常食器の大半が蓋杯類に移行する時期と捉えられている（内山1997；p28）。しかし、表2より現状の土器資料を概観すると、異なった側面がみえてくる。

まず、初期須恵器の供膳器に注目すると、杯身が出現していることが確認できる。この点は、TK73期に杯身の生産がはじまることと連動している。ただし、長原遺跡群と八尾市小阪合遺跡（高萩1987・1988、駒井2000）など、報告されているだけでも杯身が10個体以上出土している集落がある一方で、若王子遺跡や蛭池遺跡群、兵庫県神戸市玉津田中遺跡（菱田1994）では数点程度しか出土しておらず、量に差異があることには注意したい。大和においても、奈良県奈良市平城宮下層（井上ほか1980）では土師器456点に対し、須恵器腿が2点出土しているのみであり、供膳器はみられない。TG232期から継続的に須恵器が供給されている南郷遺跡群においても、下茶屋カマ田遺跡 SB177出土資料を参考とすると、土師器高杯14点に対し、須恵器杯身は1点、高杯が2点のみであり、供膳器中の須恵器が占める割

表2 中期前葉における供膳器の構成

			土師器							陶質土器・須恵器					
			高杯				杯			蓋	杯身・浅鉢	高杯		把手付碗	
			有段	有稜	無稜	碗形	外反	内湾	内傾			有蓋	無蓋		
時期	地域	遺跡名													
中期前葉	河内	長原遺跡群	●	●	●	●		○	○		●	●	○	●	●
		小阪合遺跡	○			●		○			●	●	○	○	○
	大和	南郷遺跡群	●	○	○	●		○	○		○	○		○	○
		伴堂東遺跡	●		●			○						○	
		平城宮下層	●		●	●		○	○						
	摂津	安威遺跡	○		○	●						○			
		若王子遺跡	○		○	○		○	○	○	○	○		○	
		蛍池遺跡群	○	○		○		○	○		○	○			
	播磨	玉津田中遺跡	●	●		●		●	●		○	○	○	○	○
		尾崎遺跡	○		○										

●10点以上、○10点未満出土、遺構出土で帰属時期が確定的なものを対象にした

合は土師器に比べると少ない。表に掲げた以外で他に杯身が量的に出土している集落としては、大阪府寝屋川市楠遺跡（濱田2001、塩山1997）や八尾市久宝寺遺跡（寺川・金光ほか1987）、堺市大園遺跡²⁾など、河内湖周辺や和泉地域の集落である。

そのため、TK73窯や TK216窯において杯身の生産が始まっても、すぐに手持食器が普及するのではなく、その供給される集落は依然として限定されているのである。同様に須恵器高杯も、多く出土している集落は限られている様相が見て取れる。

それでは土師器の杯は一般に用いられているのであろうか。中期前葉では有稜高杯が減少し、無稜高杯の直立気味であった口縁部がより内湾して碗形高杯が定着する（辻1999）。そして、土師器の杯が増加する傾向にある。須恵器の杯身が少ない地域や集落では土師器が代替的な役割を持っているということも想定できるために、この点について詳細にみてみよう。

そこで土師器杯が供膳器の中で占める割合に着目したい。表2を概観すると、玉津田中遺跡を除けば、同じ口縁部形状を有する土師器の杯が10点

以上出土している集落は認められないことに気づく。出土土器の個体数が報告されている平城宮下層 SD6030 上層出土土器資料を取り上げると、土師器の供膳器の内、高杯は291点出土しており、杯部が判明するもので Ba 類が130点、Bb 類51点、Bc 類18点、Ca 類が85点みられるという（井上ほか1980）。高杯の内、Ca 類は本稿でいう有段高杯、Ba 類は碗形高杯、Bb 類は無稜高杯に該当する。土師器杯は数点みられるが、全体からするとわずかである。丸底のものが3点、平底のものが2点報告されており、口縁部形状など個々の杯にバリエーションがある。

他の集落遺跡についても検討してみたい。南郷遺跡群下茶屋カマ田遺跡 SB177では土師器の高杯は脚部のみを含めて14個体が報告されており、その内訳は碗形高杯9個体、有段高杯3個体である。土師器の杯は2点しか出土していない。少数の杯に、高杯が主体を占めるあり方は同時期の下茶屋カマ田遺跡 SB71、SD05などでも同様である。

この他にも、安威遺跡住居14、蛭池東遺跡住居2、長原遺跡03 - 5次 SD713（杉本2008）³⁾ など、まとまった土器資料が得られている類例をあたると、須恵器蓋杯や土師器の杯が客体的であることがわかる。

玉津田中遺跡では SD72007 から多量の土師器杯が出土している。ただし、兵庫県たつの市尾崎遺跡（岸本・古本1995）、神戸市淡河中村遺跡（村尾ほか1992）などの播磨地域の土器様相を概観すると、土師器杯を多量に出土する集落はあまり類例がない。そのため、玉津田中遺跡のあり方は特異な例として評価することができよう。

以上の点をまとめると、中期前葉の土器様相として次の2つの点が判明する。1つは、陶質土器・初期須恵器の供膳器が供給されている集落は依然として限定されている点である。もう1つは、手持食器が定着する様相は見出せず、供膳器の主体は前代同様、土師器の置食器である。

中期後葉（TK208期） 当該期には須恵器を出土する集落が普遍的とな

る。特に「定型化」した蓋杯（田辺1981）が増加し、これらの土器を手持食器とするならば、この時期に定着するといえよう。

一方、土師器は大和・河内では有段高杯、有稜高杯、無稜高杯が少数となり、碗形高杯とが主体を占める。摂津では、杯部が深手で、口縁部が外反する無稜高杯が多く出土する。杯部形状に地域性がみられるのである。

長原遺跡の報告（京嶋1994）を参考にすると、置食器では須恵器と土師器がほぼ同率出土しており、手持食器では土師器に対して須恵器の比率が高いという供膳器の様相がみられる。津堂遺跡でも同様の傾向が認められる（一瀬ほか1988）。一方、発志院遺跡では、SD204などから多量の土器資料が得られており、その内訳は報告されているものだけでも須恵器杯身10点、高杯2点、土師器杯27点、高杯5点と土師器が目立って出土している（藤井ほか1979）。次の TK23・47期に河内や和泉地域など土師器供膳器が減少するという指摘を参考にすると（辻1999）、土師器の食器が残存する大和と須恵器が主体となる河内といった地域性の分岐点を示しているのかもしれない。

ただし、表3を参照すると、河内の津堂遺跡、小阪合遺跡、西ノ辻遺跡、

表3 中期後葉における供膳器の構成

時期	地域	遺跡名	土師器							須恵器			
			高杯			杯				蓋	杯身・浅鉢	高杯	
			有段	有稜	無稜	碗形	外反	内湾	内傾			有蓋	無蓋
中期後葉	河内	津堂遺跡				○		○	○	●	●	○	●
		小阪合遺跡	○			○		○		●	●	○	○
		西ノ辻遺跡	○			●		○	○	●	●	○	●
	大和	伴堂東遺跡		○	○	○				○	○	○	○
		発志院遺跡	○		○	○	●	○		●	●	○	○
	摂津	上津島遺跡	●		○	○		○	○	○	●	○	○
		郡家遺跡	○			○		○		○	○	○	○
		白水遺跡	○		●			○		○	○	○	○

●10点以上、○10点未満出土、遺構出土で帰属時期が確定的なものを対象にした

大和の伴堂東遺跡や摂津の豊中市上津島遺跡（服部1997）、神戸市白水遺跡（安田ほか2000）の土器様相から、土師器よりも須恵器の手持食器が目立つ。

以上の点をまとめると、中期後葉には須恵器の供膳器、特に手持食器である蓋杯が本格的に採用され、硬質、軟質の置食器、手持食器が入り混じった供膳器の構成に移行するのである。

小結 畿内地域の集落における須恵器と土師器の出土傾向を手掛かりに、5世紀における供膳器の変化について検討してきた。その結果、次の点を明らかにすることができた。

第1に陶質土器・初期須恵器供膳器の使用は急速に浸透するわけではなく、その供給は特定の集落に限定されている点である。とくに長原遺跡群は、多量かつ多器種の陶質土器・初期須恵器が出土しており、その系譜は洛東江下流域を中心とする加耶各地、または百済など朝鮮半島南部各地に及んでいる点（田中清2006）で、他の集落と様相が大きく異なっている。第2に、中期前半においては置食器としての用途をもつ土師器高杯を主としていることである。そして、第3点目として、中期後葉に須恵器の供給にみられた地域差、集落差は解消され、供膳器の構成の中に須恵器が一般化することが指摘できる。

以上の3点は、手持食器の導入時期や土師器高杯の評価など、供膳器の変化についての近年の見解とは、異なっている点が多い。朝鮮半島南部に由来する食器文化は、導入当初から面的に浸透するわけではなく、畿内地域の中でも受容に集落差がみられるのである。

食器の地域差に関しては、坂野氏によって大和に金官加耶の系譜を引く丸底食器、河内に馬韓地域に系譜がある平底杯・鉢の食器と、地域を単位とした系譜の差違が指摘されている（坂野2005）。しかし、上述した第1点目をふまえると坂野氏が説く「外交」の差異は見出せず、河内、大和と

いった地域の差ではなく、より細かな単位、すなわち集落差が顕著である。

ただし、以上の分析では機能的な役割についての検討は十分ではなかった。次にこの点を掘り下げて検討することにし、さらに議論を深めていきたい。

4. 土師器と須恵器 ―機能面からの検討―

在来の土師器と朝鮮半島南部経由からもたらされた陶質土器・須恵器では、そもそもの由来が異なる。両者の違いに関しては、製作技術や規格性を中心に研究が積み重ねられている（辻1999、中野2008c）が、機能面での検討は少ない。そこで須恵器蓋杯が出現する中期前葉と普及し始める中期後葉を対象として、機能を反映する供膳器の内容量を分析することにした。なお、土器容量の計測には田中耕作氏が紹介した方法（田中耕2006）を用いて、各地の典型的な資料を分析対象として取り上げた。

中期前葉における様相 陶質土器・初期須恵器が伴う長原遺跡 SK705（田中清1982）、同 SE703（大庭1999）、同 SD701（辻2002）、南郷遺跡群下茶屋 SB71、SB177（佐々木ほか1996）と、供膳器が在来の土師器で占められる平城宮下層 SD6030上層（井上ほか1980）、外来の軟質土器が伴う淡河中村遺跡 SH291（村尾1994）から出土した資料を対象に土師器と須恵器の関係を探ることにしたい（図3）。

それぞれ遺構の性格が異なるため、出土した土器群は日常生活の中で欠損し、廃棄されたものが累積したのかもしれないし、なんらかの儀礼の直会に用いられた食器が片付けられたものであるのかもしれない。しかし、当時の食器構成を知るうえで一つの手がかりにはなるだろう。

図3を概観すると、各集落において土師器有段高杯は1200ml以上と容量が一段と大きく、碗形・無稜高杯が口径12～15cm、容量250～500ml前後の範囲にまとまる傾向にある。有段高杯は、個人用とするには内容量が

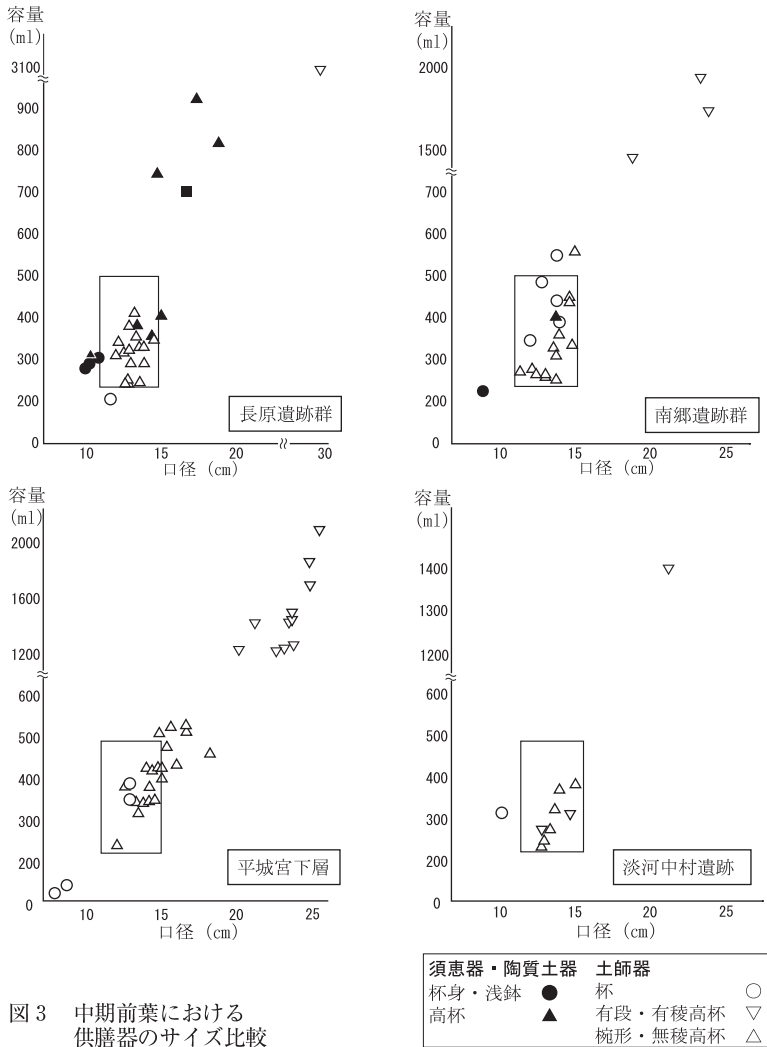


図3 中期前葉における
供膳器のサイズ比較

大きすぎるが、碗形・無稜高杯についてはおよそ一人当たりとみなしてよい量である。前章で指摘したように無稜・碗形高杯は出土量が多く、弥生時代後期における高杯や鉢・碗の容量もほぼこれと類似する(都出1982)ので、個人別食器と考えられよう。平城宮下層 SD6030上層資料では、他

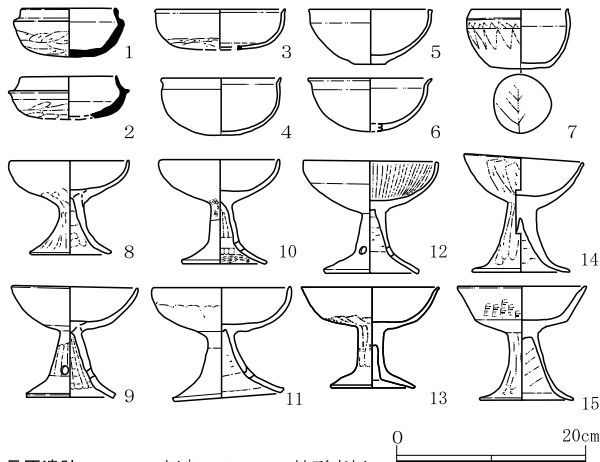
の集落に比べて大型のものが多くみられる。これは杯部の形状は変化しているものの、中期初頭における無稜高杯のサイズに近いのである。こうした差違がみられるものの、陶質土器・初期須恵器の有無にかかわらず、ある程度のサイズやその構成が共通している点には注意をしておきたい。

土師器の杯に注目すると、集落間、集落内でサイズにまとまりがなく、椀形・無稜高杯と容量が類似するものがみられるが、高杯の一般的なサイズではないため、両者では内容物や用途が異なる可能性が考えられる。

土師器の杯と高杯の杯部を検討してみると、同一集落であっても器形や口縁部の形状など細部が大きく異なっていることが判明する（図4）。これは、須恵器のように杯身と脚を別に作り、接合するという工程、すなわち「接合法」を用いず、脚部から杯部までを一体で製作するためである。須恵器と土師器では、回転台使用の有無などといった製作技術の差異と同様、工程も異なるのである⁴⁾。また、各集落において土師器の製作技術が異なっていることも確認できる。

次に、両者のサイズの関係をみてみよう。まず、土師器有段高杯に対応する容量をもつ須恵器供膳器はない。須恵器の高杯には900mlを湛え

る大型の無蓋高杯と300ml、400ml前後の容量をもつ



長原遺跡 1・2：杯身、8・9：椀形高杯

南郷遺跡群下茶屋カマ田遺跡 3・4：杯、10・11：椀形高杯

平城宮下層 5・6：杯、12・13：椀形高杯

淡河中村遺跡 7：杯、14：椀形高杯、15：有稜高杯

図4 対象集落における供膳器の比較

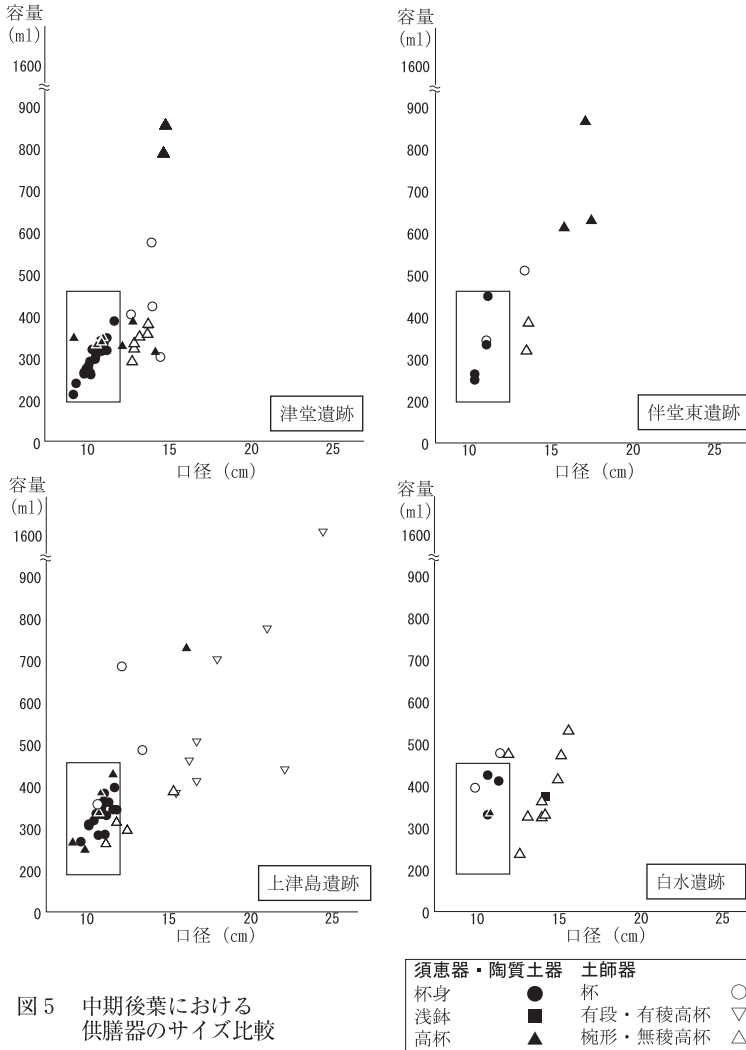
有蓋、無蓋高杯があり、後者は口径の点で異なるものの、土師器の椀形・無稜高杯や杯と容量が類似する。一方、須恵器杯身と土師器の杯は容量が一致するものが少ない。そのため、両者の互換的な性格は考えがたく、蓋の有無や口縁部の形状から考えても、使用面において相互の影響が低いことが考えられる。また、長原遺跡からは浅鉢が出土しており、口径17.8cm、705mlをはかる。数に限りがあるため、評価は保留しておきたい。

中期後葉における様相 津堂遺跡大土坑 A・B（一瀬1988）、伴堂東遺跡 SD2100（坂2002）、上津島遺跡流路（服部1997）、白水遺跡流路 2、SX01（安田2000）を分析対象とし、中期後葉の様相を考えたい（図5）。

まず、各遺跡における共通項からみていきたい。TK208期には須恵器蓋杯が増加する。白水遺跡資料は数量的に恵まれないが、各遺跡とも須恵器杯身は200～450mlの容量のことが多い。白水遺跡においては、口径14.2cm、376mlをはかる浅鉢が出土しているが、器形も容量も杯身とは異なる。一方、津堂遺跡、上津島遺跡など、有蓋高杯が伴う事例ではその杯部が杯身の容量と同一であることが多い。これは「接合法」を用いた製作工程のためである。無蓋高杯は、中期前葉と同じく、容量600ml以上のものが多い。共有の食器である可能性を考えたい。

各集落の相違点は土師器において顕著である。椀形高杯は津堂遺跡、伴堂東遺跡資料では300～400mlと共通しているが、上津島遺跡ではこれあらと同一サイズのものがなく、白水遺跡では容量300～400mlに加えて400～550mlとやや大型のものが多くみられる。また、有段高杯は上津島遺跡以外では残存状況の良好な資料が得られていない。こうしたサイズのあり方は、前章で指摘した杯部形状の差違と連動している。中期前葉において、ある程度の共通性をもっていた土師器高杯のサイズ構成に、より顕著な地域差がみられるようになるのである。

土師器杯もまた、前代と同様、各集落でサイズがまちまちであり、須恵



器蓋杯、有蓋高杯のようなまとまりは見出せない。また、椀形高杯と必ずしも容量が同一ではなく、中期前葉にみられた様相が継続している。

ここで、須恵器と土師器の関係を探る上で重要であるのは、土師器無稜・椀形高杯と須恵器器蓋杯、有蓋高杯は容量200～450mlと内容量がほぼ同一

であることである。土師器と須恵器では、蓋の有無によって口縁部形状が異なるために、散布図では重ならないものの、新旧の主体をなす食膳器が同一容量であることは興味深い。中期前葉においても、長原遺跡群例において同様の様相が認められたが、土師器の置食器に須恵器の置食器、手持食器が加わる供膳器のあり方が普及するのである。

研究史で整理したように、個人別食器の成立をめぐる議論においては、土師器高杯という置食器と、須恵器蓋杯という外来の手持食器のどちらかに力点を置くのかによって評価が異なってきた。しかし、供膳器構成のあり方とともに、両者の内容量をふまえると、どちらも個人別食器という性格を有すると考えられる。

ただし、須恵器では脚台や蓋の有無など、その使用方法などに大きな違いはあることは確実である。そのため、5世紀における食器の変化は、個人別食器の出現が画期的なのではなく、朝鮮半島南部からの食器やその使用法が導入されたことを重要視すべきであろう（内山1997）。住吉宮町5号墳では、周濠から土師器碗形高杯、小型有段高杯の杯部に須恵器の蓋杯が重なるようにして出土している（安田ほか2001）が、こうした資料は導入期における両者の近縁性を示しているのではないだろうか。

小結 以上、述べてきたように、内容量を通して供膳器をみると、より変化の内容がより明らかとなってきたように思われる。

中期前半の食卓風景を復元してみると、個々人が用いる碗形・無稜高杯に加えて、共有する大型有段高杯が伴うあり方が、畿内地域では一般的であると考えられる。特定集落に限って、各々の食膳に軟質、硬質の置食器、手持食器が並ぶといった、在来の供膳器に外来のものを取り入れた食事風景がみられるのである。

中期後半には土師器の置食器に加えて、須恵器の置食器、手持食器が普及し、新しい食器様式へと変化する。こうした供膳器の変化は、個人別食

器の出現といったものではなく、外来の供膳器とその使用形態の導入にある。ただし、依然として土師器の置食器も多く見られるため、取捨選択の上に新しい供膳様式となっているとみるべきであろう。中期前葉に特定の集落にみられた供膳器の構成が波及するのである。

5. まとめ

本稿では、5 世紀の供膳器について、初期須恵器受容の様相、内容量の比較からみた須恵器と土師器の関係について考察してきた。その結果、供膳器の変化と地域性、そしてその背景がおぼろげながらわかってきた。

従来の研究では当該期の供膳器の変化として、須恵器の導入が強調されてきたきらいがあるが、その出現期では依然として個人別食器である土師器の置食器が主体である。変化の内容としては、個人別食器の導入という側面ではなく、土師器の置食器に、外来の供膳器とその使用形態を導入した点を重要視すべきであろう。そして、そのあり方に集落といった小さな地域単位における差が顕著になるのである。

ここでいう「地域差」とは、これまでの土師器研究によって説かれているような、共有する製作技術の単位としての地域性とは異なり、外来の供膳器の受容に関する差異である。また、河内と大和における食器の系統差も指摘されているが、朝鮮半島南部各地の影響がみられる陶質土器・初期須恵器は、河内湖周辺の特定の集落に結集するのである。

ここで、同じく朝鮮半島南部からもたらされた煮炊器である韓式系軟質土器の受容のあり方と重ね合わせてみたい。筆者は先に畿内地域を対象に、外来の煮炊器をすみやかに受容する集落（渡来系集団定着型集落）と、その影響を受けながら在来の煮炊器が徐々に変容する集落（在来集団主体型集落）と、外来の調理様式や土器製作技術の受容過程に集落差が表れることを指摘した（中久保2009）。

このうち、前者は長原遺跡群が該当し、本稿で明らかにしたように多量かつ多器種の陶質土器・初期須恵器が出土している。調理の面においても供膳の場面においても朝鮮半島南部の影響が強い集落であることが鮮明となる。一方、在来集団主体型集落に該当する集落では、初期須恵器が出土していても量が少なく、土師器高杯を主要な供膳器としている。土師器供膳器と煮炊器が外来の土器様式に影響を受けるあり方は、単純な対応関係は示さないものの、5世紀における渡来文化の導入には磁石のような核となる集落、地域が存在していることが浮かび上がってくるのである。

謝辞 本稿を作成するにあたっては、福永仲裁教授、高橋照彦准教授、寺前直人助教のご指導をいただきました。また、大阪大学考古学研究室の奥村茂樹、酒井将史、仲辻慧大、野島智実、森暢郎の諸氏に多くを学ばせていただいた。韓式系土器研究会などを通じて、田中清美氏や中野咲氏、大坪州一郎氏、渡辺和仁氏からは様々なご教示を賜りました。韓国語要旨の作成にあたっては田中由理氏にご協力いただきました。末筆ですが、記して感謝申し上げます。

資料調査では大阪府教育委員会、大阪府文化財センター、大阪市文化財協会、奈良県立橿原考古学研究所、寝屋川市教育委員会、兵庫県立考古博物館、平安学園高等学校に便宜をはかっていただきました。御礼申し上げます。

なお、本稿は日本学術振興会特別研究費奨励費の成果の一部である。

注

- 1) 具体的には、南郷遺跡群大東遺跡 SX01出土土器と同遺跡 6 tr 出土資料は、坂野氏の編年では時期が異なるが、報告書の記載を参照すると同一遺構から出土しているなど、時期比定の根拠がよくわからない。筆者は、土師器の編年については辻氏の研究を支持したい(辻1999)。
- 2) 大園遺跡出土資料は、韓式系土器研究会の折に、未報告のものも含めて実見する機会を得た。
- 3) この資料は須恵器の出土量が少なく、有稜高杯が主体を占め、長原遺跡の中で特異な様相を示している。他地域からの搬入も想定しておきたい。
- 4) 例えば長原遺跡03-6次 SD057資料(大庭2005)のように接合法を用いて製作する高杯も見られる。しかし、類例は少なく、後に定着していないために、基本的には須恵器と土師器の供膳器生産は互いに影響を与えていないと考えている。

参考文献

- 青柳泰介2003『南郷遺跡Ⅲ』 奈良県立橿原考古学研究所 337-351頁
- 一瀬和夫ほか1988『南河内遺跡群発掘調査概要・Ⅰ』 大阪府教育委員会
- 亥野 彊ほか1998『蛭池西遺跡』 蛭池西遺跡調査団
- 井上和人ほか1980『平城宮発掘調査報告Ⅹ』 奈良国立文化財研究所
- 今津啓子1994「渡来人の土器—朝鮮系軟質土器を中心として—」『ヤマト王権と交流の諸相 古代王権と交流』 名著出版 111-139頁
- 今村道雄ほか1987『久宝寺南（その1）』 大阪府教育委員会・大阪文化財センター
- 内山敏行1997「手持食器考—日本の食器使用法の成立—」『HOMINIDS』 Vol.001 CRA 21-47頁
- 宇野隆夫1999「古墳時代中・後期における食器・調理法の革新—律令制的食器様式の確立過程—」『日本考古学』 第7号 日本考古学協会 25-42頁
- 大西貴夫ほか1999『西坊城遺跡』 奈良県立橿原考古学研究所
- 大庭重信ほか1999『長原遺跡発掘調査報告Ⅶ』 大阪市文化財協会
- 大庭重信ほか 2005『長原遺跡発掘調査報告ⅩⅡ』 大阪市文化財協会
- 岡戸哲紀1995「TG232号窯の初期須恵器」『陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ』 大阪府教育委員会 大阪府埋蔵文化財協会 271-304頁
- 奥 和之・酒井泰子2000『安威遺跡』 大阪府教育委員会
- 岸本道昭・古本寛1995『尾崎遺跡Ⅱ』 龍野市教育委員会
- 亀田修一2003「渡来人の考古学」『七隈史学』 4 七隈史学会 1-14頁
- 北山峰生2009『松山遺跡』 奈良県立橿原考古学研究所
- 京嶋 覚1994「韓式系土器から土師器へ—大阪市長原遺跡の検討から—」『韓式系土器研究』 V 韓式系土器研究会 166-175頁
- 黒須靖之2005『郡遺跡発掘調査概要報告書』 茨木市教育委員会
- 駒井正明ほか2000『小阪合遺跡』 大阪府文化財調査研究センター
- 合田幸美ほか1994『宮の前遺跡・蛭池東遺跡・蛭池遺跡・蛭池西遺跡1992・1993年度発掘調査報告書』 大阪文化財センター
- 佐々木好直ほか1999『南郷遺跡群Ⅱ』 奈良県立橿原考古学研究所
- 定森秀夫1994「陶質土器からみた近畿と朝鮮」『古代王権と交流 ヤマト王権と交流の諸相』 名著出版 77-110頁
- 佐原 眞1983「食器における共用器・銘々器・属人器」『文化財論叢』 奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会 同朋社 1141-1162頁
- 塩山則之1998『楠遺跡』『寝屋川市史』 第1巻 寝屋川市史編纂委員会
- 三宮昌弘1889「初期須恵器製作集団と韓式系土器」『韓式系土器研究』 Ⅱ 韓式

- 系土器研究会 1-11頁
- 白井克也2001「百済土器・馬韓土器と倭」『検証 古代の河内と百済』 枚方歴史フォーラム実行委員会 119-137頁
- 杉本厚典2008『長原遺跡発掘調査報告』XⅦ 大阪市文化財協会
- 高萩千秋ほか1987『小阪合遺跡』 八尾市文化財調査研究会
- 高萩千秋ほか1988『小阪合遺跡』 八尾市文化財調査研究会
- 高萩千明ほか1990『小阪合遺跡』 八尾市文化財調査研究会
- 田中耕作2006「簡易な土器容量測定方法の紹介」『新潟考古学談話会会報』第31号 新潟考古学談話会 1-10頁
- 田中清美1989「五世紀における摂津・河内の開発と渡来人」『ヒストリア』第125号 大阪歴史学会 1-25頁
- 田中清美2002「須恵器定型化への過程」『田辺昭三先生古稀記念論文集』 田辺昭三先生古稀記念の会 207-226頁
- 田中清美ほか2002『長原遺跡発掘調査報告』Ⅷ 大阪市文化財協会
- 田中清美2005「河内湖周辺の韓式系土器と渡来人」『ヤマト王権と渡来人』大橋信弥・花田勝広編 サンライズ出版 65-89頁
- 田中清美2006「長原遺跡出土の初期須恵器の検討—長原遺跡東部地区の古墳時代中期集落を中心に—」『須恵器生産の成立と展開』2005年度大阪府文化財センター・近つ飛鳥博物館共同研究発表会 大阪府文化財センター 29-57頁
- 田辺昭三1966『陶邑古窯跡群』I 平安学園考古クラブ
- 田辺昭三1981『須恵器大成』 角川書店
- 辻 美紀1999「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究室10周年記念論集—』 大阪大学考古学研究室 351-365頁
- 辻 美紀2002「河内地域における古墳時代中期の土師器」『長原遺跡発掘調査報告書』IX 大阪市文化財協会 66-76頁
- 都出比呂志1982「畿内第五様式における土器の変革」『考古学論考』 小林行雄 博士古稀記念論文集刊行委員会 岩波書店 215-243頁
- 都出比呂志1984「畿内の社会・生活—籩豆手食の俗—」『季刊考古学』第6号 雄山閣 55-58頁
- 都出比呂志1989「個人別食器の成立」『日本農耕社会の成立過程』 岩波書店 155-163頁
- 寺井 誠2002「韓国全羅南道に系譜が求められる土器について」『大坂城跡』V 大阪市文化財協会 51-56頁
- 寺井 誠ほか2006『長原遺跡発掘調査報告』XV 大阪市文化財協会

- 寺川史郎・金光正裕ほか1987『久宝寺北（その1～3）』大阪府教育委員会・大阪文化財センター
- 中久保辰夫2008「摂津地域における古墳時代中期の煮炊器」『待兼山遺跡』IV 大阪大学埋蔵文化財調査委員会 83-94頁
- 中久保辰夫2009「古墳時代中期における韓式系軟質土器の受容過程」『考古学研究』第56巻第2号 考古学研究会 62-82頁
- 中野 咲2008a「古墳時代中・後期における土師器坏の変遷と地域性—奈良盆地の事例について—」『吾々の考古学』和田晴吾先生還暦記念論文集刊行会 321-335頁
- 中野 咲2008b「韓式系土器」分布論の現状と課題『橿原考古学研究所論集』第十五 八木書店 243-260頁
- 中野 咲2008c「接合技法からみた古墳時代中・後期の土師器高杯—いわゆる刺突法とその周辺—」『韓式系土器研究 X』韓式系土器研究会 25-42頁
- 西 弘海1982「土器様式の成立とその背景」『考古学論考 小林行雄博士古稀記念論文集』小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会 447-471頁
- 西口陽一1994『野々井西遺跡・ON231号窯跡』大阪府教育委員会・大阪府埋蔵文化財協会
- 西口陽一・宮崎泰史1987『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査概要』IV 大阪府教育委員会
- 服部聡志1997『上津島遺跡 第5次発掘調査報告』上津島遺跡調査団・豊中市教育委員会
- 浜田延充2001『楠遺跡Ⅱ』寝屋川市教育委員会
- 坂 靖ほか1996『南郷遺跡群Ⅰ』奈良県立橿原考古学研究所
- 坂 靖ほか2000『南郷遺跡群Ⅳ』奈良県立橿原考古学研究所
- 坂 靖ほか2002『伴堂東遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
- 坂野和信2005「畿内と東国の古墳時代中期における韓半島系食器—丸底と平底食器の系譜—」『考古学雑誌』第89巻第3号 日本考古学会 25-61頁
- 菱田淳子1994『玉津田中遺跡』第2分冊 兵庫県教育委員会
- 藤井利章ほか1979『発志院遺跡』奈良県立橿原考古学研究所。
- 藤田憲司1999「初期須恵器大甕考」『大阪府文化財調査研究センター研究調査報告』第2集 大阪府文化財調査研究センター 137-164頁
- 藤本史子ほか1992『郡家遺跡』大手前女子大学史学研究所
- 松村隆文ほか1983『土師の里遺跡発掘調査概要』V 大阪府教育委員会
- 松本百合子ほか2001『長原遺跡東部地区発掘調査報告』IV 大阪府文化財協会
- 村元健一2003『長原遺跡東部地区発掘調査報告』VI 大阪府文化財協会

- 村尾政人ほか1992『淡河中村遺跡』 淡神文化財協会・淡河中村遺跡調査団
 米田敏幸1981『八尾南遺跡』 八尾南遺跡調査会
 安田 滋ほか2001『住吉宮町遺跡 第24次・32次発掘調査報告書』 神戸市教育委員会
 安田 滋2000『白水遺跡第3・6・7次 高津橋大塚遺跡第1・2次発掘調査報告書』 神戸市教育委員会
 柳本照男2005『新修豊中市史 第4巻考古』 豊中市史編さん委員会
 渡辺 昇ほか2006『若王子遺跡』 兵庫県教育委員会
 朴天秀1995「渡来系遺物からみた伽耶と倭における政治的変動」『待兼山論叢』第29号 大阪大学文学会 53-84頁

図版出典

図1・4. 各報告書より、一部改変して、再トレース

図2、3、5 中久保作成

表1 検討対象資料

- 長原遺跡群**：NG99-15 SX706 (田中ほか2002)、NG98-19 SX701 (松本ほか2001)、NG84-6 SX703上層 (寺井ほか2006)、NG00-6 SX702、SD701 (村元2003)、NG02-8 SK040、NG03-6 SK055、057 (大庭ほか2005)
土師ノ里遺跡：SB01 (松村ほか1983)
南郷遺跡群：角田 SX01、03、09 (坂ほか1996)、佐田 SB08 (佐々木ほか1999)、千部 SB02、03、04 (坂ほか2000)
伴堂東遺跡：SK1054、1088、1153、2066、2146、2202、2260、2505 (坂ほか2002)
安威遺跡：住居15、16、17、24、25、27、28 (奥・酒井2000)
若王子遺跡：SP264、SK84 (渡辺ほか2006)
蛭池遺跡群：住居7、13、23、25、溝2 (合田ほか1997)、流路 (亥野ほか1998)

表2

- 長原遺跡群**：NG82-41 SE703 (杉本2008)、NG84-4 SD701、SD702 (寺井ほか2006)、NG99-15 SB702、SK705、SX724、SD717 (田中ほか2002)、NG00-11 SD701 (辻2002)、NG02-8 SD017、018、021、SB013・014周辺、SE002、003、SK042、SX007上層、NG03-5・6 SB702、SD713、SD045、SK068、092、SX013周溝上層 (大庭ほか2005)、NG06-4 SB7001、SB7003 (杉本ほか2008)
小阪合遺跡：土坑435 (駒井ほか2000)、SK14 (高萩ほか1987)、河川1 (高萩ほか1990)、SD1(A層) (高萩ほか1988)

南郷遺跡群：下茶屋カマ田 SB10、SD05、07 (坂ほか1996)、SB71、SB177 (佐々木ほか1999)

伴堂東遺跡：ST2001、SK2067、2151 (坂ほか2002)

平城宮下層：SD6030上層 (井上ほか1980)

安威遺跡：住居 9、12、14、18、19、33 (奥・酒井2000)

若王子遺跡：SP240、SD16、44、49、SE09、SK102、111、SX06 (渡辺ほか2006)、包含層資料除く

蛍池遺跡群：住居1、2、12 (合田ほか1997)

玉津田中遺跡：SD72001、72007 (菱田1994)

尾崎遺跡：6-河川 (岸本・古本1995)、包含層資料除く

表 3

津堂遺跡：大土壙 A・B (一瀬ほか1988)

小阪合遺跡：土坑331、350 (駒井ほか2000)、SK13 (高萩ほか1990)

西ノ辻遺跡：自然河川 (西口・宮崎1987)、

伴堂東遺跡：SD2100、SK2064 (坂ほか2002)

発志院遺跡：SD113、206 (藤井ほか1979)

上津島遺跡：流路 1 (服部1997)

郡家遺跡：自然流路、土器溜り 3、5 (藤本ほか1992)

白水遺跡：SX01、流路 2 (安田2000)

(文学研究科博士後期課程、日本学術振興会特別研究員)

5 세기의 식기(供膳器)의 변화와 지역성

【韓国語文】

본고에서는 5 세기의 식기(供膳器)에 보이는 변화와 지역성에 대해서, 初期 須惠器의 수용과 토기 내용량의 비교에서 본 須惠器와 土師器의 관계를 바탕으로 고찰했다.

종래의 연구에서는, 이 시기의 변화로서 한반도 남부에 유래되는 須惠器의 도입이나 그것에 수반된 식기 사용방법의 수용이 강조되어 왔다. 土師器의 놓고 먹는 식기(置食容器)에서 須惠器의 놓고 먹는 식기(置食容器), 손에 들고 먹는 식기(手持食器)가 더해지는 변화는 古墳時代 중기 후반에 이르면 畿内の 모든 취락에서 나타난다.

그러나 고분시대 중기 전반까지 畿内 각지의 취락에서는 일반적으로 土師器 高杯가 식기(供膳器)의 주체를 차지하며, 특정의 취락에서만 도질토기와 初期 須惠器의 식기(供膳器)가 적극적으로 수용되고 있다. 외래 식기(供膳器)의 수용에는 취락마다 차이가 현저히 나타난다.

이러한 渡來文化의 수용 양상은 煮炊器의 양상과도 유사하다. 토기로 본 韓半島系 도래문화의 도입에는 중심(核)이 되는 취락을 찾을 수 있는 것이다.

キーワード：渡来文化、個人別食器、地域性